



ふとした切っ掛けで
その人の生き方が変わるという事があれば、
私は俳句に出会った時からと思う。
季語で表す日本語の美しさ。
肌で感じる季節感。
そして俳句の奥深さに気づき魅了されている私。

「ろんど」故・鳥居おさむ主宰の俳句セミナーを受講し、
兼題、席題に嬉々としていた日々の俳句の中から
おさむ先生を偲ぶ30句。

2007年4月30日 中島 謙良(なかじまさら)

初富士を正客とせんティータイム

禅林の残る蟬穴淑氣満つ



藁灰の端正な嵩春火桶



点滴を音と記憶す春の暁

地球儀に上下ありけり四月馬鹿

黄昏の足踏みしたる花明り

嬰の瞳まだ雲をとらへず絮たんぽぼ

余花白し山のひかりをあつめては

流木として長き日々梅雨に入る

今を生きる確かにかたち蟻の列

ガラス器の音のいろいろ夏料理

水打つて土の正気を戻したる

熱砂踏む足裏一瞬闇のごと

向日葵は長き看取りの終の花

鳥葬の鳥を選りより夏の夢

白日傘外に使ひし顔入れて

風鈴の音は金色南部鉄

夏風邪の味薺の鋸や薄荷糖

処暑の日の背広は男の戦闘服

しつかりと食べて秋思と言ふ女

星月夜をとこの夢の尾鰭かな

打ち始め魚板の窪の冬陽飛ぶ

革ジャンの屈折したる若さかな

白樺の白を骨とし山眠る

父の忌や煮凝り出来ぬ土地に嫁し

孫もゐて雪遊びする野辺送り

桜までさくらまではと雪に逝く

捨て傘の赤は枯野の痛みかな

立冬の根のあるものの起ちし影

天に根を張りたるごとく枯木立

 Tokyo Mnemosyne 東京ムネモシュネ

Tokyo Mnemosyne e-books

<http://haikustock.com>

A4用紙に印刷して2つ折りにします。右端をホッチキス留めするとA5判の小句集に仕上がります。
個人で楽しむ範囲でのダウンロード、印刷以外の無断転載・コピー・流用は一切禁止します。